

2019 年度 音楽図書館協議会 秋季研修会報告

テーマ「音楽学のオンラインリソースを活用する効果的な文献検索」

日時：2019年11月12日（火）13：30～15：00

会場：パシフィコ横浜 展示ホール E204

講師：古永誠氏 【EBSCO Information Services Japan 株式会社】

音楽図書館協議会の秋季研修会として、音楽系リソースを利用した情報検索についてのセミナーを開催しました。データベース、電子書籍の活用方法、膨大な量のデータから必要な情報をより正確に入手するディスカバリーサービスについてお話いただきました。現代の資料検索の多様性や、音楽図書館が今後発展していくためのヒントになるようなお話をうかがい、大変参考になりました。

講師の古永さまからの講演要旨の一部をご紹介します。

「音楽学分野のデータベースは、検索対象の出版物や年代ごとに著名なデータベースが複数あります。その中心となるのは国際音楽学会と国際音楽資料情報協会の国際的事業である R-Project と呼ばれる RILM, RIPM, RISM によるデータベースです。雑誌記事や書籍等の文献を検索するには RILM, RIPM, Music Index となり、さらにカバーする年代ごとに RILM (1800 年代から現在)、RIPM (1760 年から 1966 年)、Music Index (1970 年から現在) となります。一方、楽譜や音楽そのものを検索するには RISM や IPM を使用し、RISM は 1600 年から 1800 年代までの手稿譜の所在目録、IPM は古代ギリシャ時代から現在まで幅広い時代の音楽をカバーします。探したい情報に応じて、これらのデータベースを使い分ける必要があります。

電子書籍については、国内の導入状況等のトレンドとして、図書館での電子書籍の導入タイトル数は年々増加している一方で和書の電子化は洋書に比べて遅れています。紙にはない電子ならではのメリットとして、本文内検索、文献検索データベースとの横断検索等について、実際の導入図書館で行われている運用面での工夫についてもご紹介しました。

近年の図書館情報資源の急速なオンライン化により、音楽の分野でも多種多様なオンラインリソースが図書館利用者に提供されるようになった一方で、利用者にとっては自分が使うべきリソースを判断するのが難しくなるというジレンマも生じています。ディスカバリーサービスが誕生するまでの経緯と仕組みを理解することによって、音楽学の学生、研究者にとってディスカバリーサービスがどのように必要な情報の発見を支援し得るのか、その現状と今後の可能性についてご説明しました。」